

＜中学校 学年経営＞

学年の協働体制の確立を目指す学年経営

－総合的な学習の時間における学校支援組織との連携を通して－

知念村立知念中学校教諭 大 湾 悟

内容要約

学年の協働体制の確立を目指すために、島尻地区の教職員にアンケートを実施し、協働体制の実態を把握した。それをもとに、総合的な学習の時間の取組を通して、先ず学年教師が目的を共有化するために、学年共通の課題から達成可能な目的と役割方法を示した提案をした。そして目的達成の意欲を高めるために、提案内容について意見を述べ役割を決定し責任を明確にした。さらに共通した実践を行うため、進捗状況表を活用した教育活動を行った。

その結果、学年の協働体制の確立を図ることができた。

【キーワード】 学年の協働体制 目的の共有化 目的達成の意欲 共通した実践

目 次

I	テーマ設定の理由	41
II	研究内容	42
1	学年の協働体制	42
2	学年の協働体制を確立するための手だて	44
3	学校支援組織	45
III	研究の実践	47
IV	研究全体の考察	48
1	学年の協働体制は確立が図れたか	48
2	学校支援組織との連携を通して、総合的な学習の時間の充実が図れたか	50
V	研究の成果と今後の課題	50
1	研究の成果	50
2	今後の課題	50

＜中学校 学年経営＞

学年の協働体制の確立を目指す学年経営

－総合的な学習の時間における学校支援組織との連携を通して－

知念村立知念中学校教諭 大 湾 悟

I テーマ設定の理由

我が国の教育は、児童生徒に「生きる力」を育成することを基本的なねらいとしている。そのため、各学校は特色ある学校づくりを目指し、家庭・地域社会と連携を密に「開かれた学校づくり」に取り組んでいる。本県の教育目標には、「家庭・学校・地域社会の相互連携のもとに、時代の変化に対応し得る教育の方法を追求し、生涯学習を推進する」と謳われている。本校でも、「①郷土について深く理解し、誇りをもって語ることができる生徒を育成する。②職場体験・福祉体験・環境教育を通して、将来の進路について、幅広く考えることができ、自らの進路を自己決定できる生徒を育成する。」を総合的な学習の時間の目標に掲げ、地域社会の協力を得ながら教育実践を行っている。

学年主任として、学年教師の協力を得ながら、地域社会と連携を図り総合的な学習の時間の企画・運営を行ってきた。しかし、総合的な学習の時間の展開が円滑に推進できないことがあった。それは、学年教師を組織として機能させることが不十分であった。その原因として学年教師間の認識にずれがあり、それぞれの取組に差異が生じたため共通実践を行うことができなかったこと。また、どの教師もこれからの教育実践には、地域社会の連携が重要であり、必要性を感じている一方で、各教科の専門を軸に考え行動する傾向にあり、それが地域社会と連携した総合的な学習の時間の取組の差異となって表れていることなどが考えられる。取組の差異をなくし学年の教育活動を組織として機能させるためには、学年の協働体制の確立が大切である。

学年経営は、学級を基本単位として学年主任を中心に学年教師が学校教育目標をもとに、学年教育目標を設定し、目標の実現に向けて、計画的、組織的に協働して教育活動を実践することである。そのためには、学年の協働体制を確立し、継続的、組織的に教育活動を展開することが重要である。協働体制を確立するためには、達成しようとする目的を共有化し、目的達成のために主体的に関わりたいという意欲と共通した実践が必要になる。学年の協働体制を確立することにより、総合的な学習の時間の充実した教育活動が展開できると考えられる。

そこで、本研究では、島尻地区中学校を規模別に抽出した6校の教諭を対象に学年の協働体制の実態を把握する。それをもとに、総合的な学習の時間における学校支援組織との連携を通じた学年協働体制の確立を目指す学年経営の在り方を明らかにする。

＜研究仮説＞

学年の協働体制の実態を把握し、総合的な学習の時間における学校支援組織との連携を通して、以下の取組を行えば、学年の協働体制が確立できると考えられる。

- 1 学年教師が学年の目的を共有化するために、学年共通の課題をアンケートや話し合いで確認し、達成可能な目的と役割、方法を示した提案をする。
- 2 目的達成の意欲を高めるために、提案内容についてそれぞれの立場から意見を述べ、話し合いにより役割分担を決定し責任を明確にする。
- 3 共通した実践を行うために、各自の進捗状況を確認し、互いに協力、支援する。

Ⅱ 研究内容

1 学年の協働体制

(1) 学年経営

学年経営が重視されたのは1960年代からである。生徒数の増加による学校規模の拡大に伴う同一学年内の学級数が多くなったことや、学級担任制を中心とする学習組織の見直しの動きの高まりの中、学年において学級間の連携・調整や統一を図る学年経営が注目された。それまでの授業の進度調整や事務連絡を主とした学年経営から、学年全体としての教育や運営に関する活動を重視した学年経営が求められるようになった。これは、“調整”を中心とする学年経営から“協働”を重視する学年経営への転換を意味する。今日においては、不登校やいじめなどの課題の増加などの他、開かれた学校の推進や教育課程を実施する上で、ますます学年の協働体制をもとにした教育活動を推進する学年経営が求められている。

(2) 協働体制

協働体制とは、特定の目的を達成するために二人以上の人間が共に実践することである。この協働体制を確立するためには、達成しようとする目的を共有化できること、そして目的を達成しようとする主体的意欲が生まれ、他者と共に行動する必要性を自覚して実践することが重要となる。

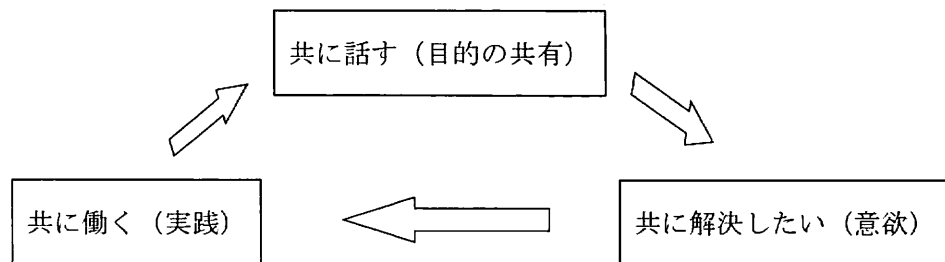


図1 協働体制

(3) 学年の協働体制

学年経営は、学年主任を中心に学年教師が学校目標をもとに学年目標を設定し、目標の実現に向けて計画的、組織的に協働して教育活動を実践することである。そのためには、学年教師が学年の課題を把握し、その課題をもとに目的の共有化を図り、目的達成のために主体的に関わりたいという意欲を高め、共通した教育実践を行う学年の協働体制の確立が必要である。

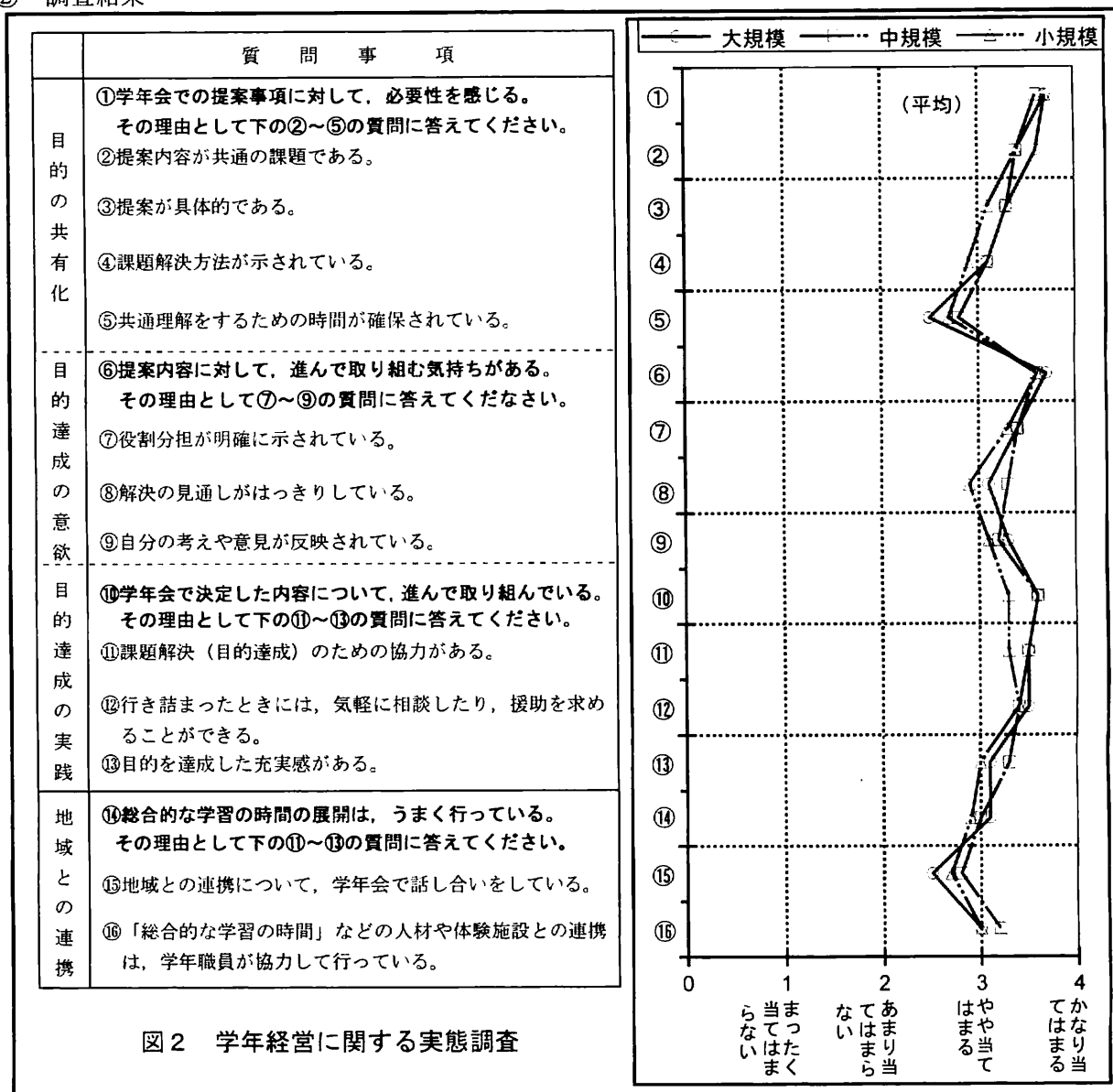
(4) 学年経営に関する実態調査

学年の協働体制の確立の手だてを明らかにすること、また総合的な学習の時間における地域との連携の実態を把握するために島尻地区中学校を大規模校、中規模校、小規模校別に抽出した6校の教諭を対象にアンケートを実施した。

① 調査方法

- ア 調査内容：学年の協働体制，地域との連携
 - イ 調査対象：教諭110名
 - ウ 調査方法：多岐選択肢法（一部記述式）
 - エ 調査期間：平成17年6月6日～16日
- 尚、紙面の都合上一部抽出し記載する。

② 調査結果



③ 考察

ア 学年の協働体制

目的の共有化については、「提案内容が共通の課題である」ほど、また「提案内容が具体的である」ほど学年会の提案事項に対して必要性を感じていることが分かる。目的達成への意欲については、「自分の意見が反映されている」さらに「役割分担が明確に示されている」ほど提案内容に対して、進んで取り組む気持ちがあることを示している。目的達成への実践については「行き詰まったときには、気軽に相談したり、援助を求めることができる」「課題解決の協力がある」ほど学年で決定したことについて、進んで取り組んでいることを示している。

イ 地域との連携

地域との連携は、地域の人材や体験施設との連携を学年職員が協力して行うことにより、総合的な学習の時間の展開がうまく行くと考えられる。

アンケートの結果は、大規模校、中規模校、小規模校とも同じ傾向を示しており、学年の協働体制の確立のための手だては、規模に関わらず有効であると考えられる。

これらの結果を踏まえ、学年の協働体制を確立するための手だてを図る。

2 学年の協働体制を確立するための手だて

学年の協働体制を確立するためには、①学年教師が目的を共有化すること②目的達成の意欲を高めること③共通した実践を行うことが重要である。

(1) 目的を共有化する

学年教師が学年の目的を共有化するためには、先ず学年の課題を明確にし、目的を設定することが大切である。

① 学年の解決しなければならない共通の課題であること

学校目標や学年目標に基づいて学年教師のアンケートや話し合いの結果により、学年の解決しなければならない共通の課題を確認する。

② 達成可能な目的を提案すること

課題に関するアンケートの結果をもとに達成可能な目的を提案し、話し合いにより目的を決定することにより目的の共有化が図れる。

③ 目的達成のための一つ一つの役割と手だてが分かる内容であること

生徒の側に立って、実践過程を予測し、目的達成のための具体的な役割と手だてを提案することが大切である。

④ 計画 → 実施 → 評価 → 改善に基づいた提案であること

実施後の検討、評価したことが次の実践に生かすことができる提案であることが大切である。

⑤ 話し合う時間を確保すること

時間を有効に活用するため、連絡事項は学年黒板や連絡表を活用する。また、学年会での提案書は事前に配布し読む時間を確保する。そして、話し合う時間と場所を確保することが大切である。

(2) 目的達成の意欲を高める

話し合いを通して、学年で取り上げた課題や目標について実践的に参画できるように徐々に意欲を高めていく必要がある。

① 解決の見通しがはっきりしていること

目的を達成するために具体的な役割と手だてを示した提案について、話し合いを行い課題解決の見通しをはっきりさせることが大切である。

② 提案事項について、それぞれの立場から意見を述べるができる工夫をすること

提案書は、事前に学年教師に配布する。提案された内容に対して学級の状況・教科など自分の立場から意見が言える時間と雰囲気をつくることが大切である。

③ 教師の役割分担を明確にすること

提案に際して、役割を押しつけるのではなく、話し合いにより役割分担を決定する。そのことで責任が明確になる。

(3) 共通した実践を行う

学年教師が共有化された目的に沿って、意欲的に共通した実践を行うためには、協力、支援が必要である。

① 実践で問題が生じた場合、全体で解決方法を確認すること

進捗状況表に進捗状況を記入し、問題が生じた場合は、互いに協力や支援を行い着実に実践できるようにする。また、学年を超える問題が生じた場合は、他学年や校長・教頭と連携して問題を解決する。

② 効果が見られた場合、全体で認め、次の実践へ生かすこと

実践の途中でも効果がある場合は、学年全体あるいは学校全体に報告する。互いに認め合うことにより、意欲が高まり、実践に繋がる。

③ 実施後の検討、評価を行い、次の実践に生かすこと

実施後の検討、評価を行い、課題については課題解決の方法を確認する。また、成果については、互いに認め合い、目的を達成した充実感を高め、次の実践に生かすことが大切である。

3 学校支援組織

(1) 学校、家庭、地域社会との連携

学校、家庭、地域社会が連携し、子どもたちの「生きる力」を育むためには、「教育の役割は子どもたちの発達を扶ける営みである」という基本的な認識をもとにした教育活動の展開が重要である。

特に総合的な学習の時間の自然体験活動やボランティア活動などの社会体験は、地域の人材や施設を積極的に活用する必要がある。そこで学校、家庭、地域社会が連携した組織の設置が望まれる。

(2) 総合的な学習の時間における学校支援組織体制

学校、家庭、地域社会の連携を図るために、学校内においては、学校に対する支援が学校行事から選択教科などの教育課程にまでまてまがることがあるので、学校内の組織を包含した横断的な組織を設置することが大切である。また、学校外においては、教育委員会を中心とした学校、家庭、地域社会と連携した学校支援組織の設置が重要である。

総合的な学習の時間では、自然体験学習やボランティア活動などの社会体験、観察、実験、見学や調査、発表などの体験的な学習、問題解決的な学習活動が中心となる。学校内だけでは、これらの豊かな体験活動の場を提供することは困難である。そこで地域の人材、専門的な施設の情報や協力を得るための学校、家庭、地域社会が連携した学校支援組織の設置が必要である。

(3) 学校支援組織の設置

ア 地域では、地域の人材や施設の情報収集、協力等を行うために学校、家庭、地域社会と連携した知念村「知念子の挑戦」地域推進協議会（知念村教育委員会、知念中学校、知念村商工会、沖縄県JA知念支店、知念村漁業共同組合、知念村社会福祉協議会）を設置する。

イ 学校では、各学年の課題や要望を検討し、知念村「知念子の挑戦」地域推進協議会と連携して人材や施設を学校の教育活動に活用するために校長・教頭、学年主任を中心に設置した校内「知念子の挑戦」推進委員会を設置する。

ウ 各学年では、地域の人材、施設を活用した総合的な学習の時間における課題や要望等を検討する学年「知念子の挑戦」推進委員会を設置する。

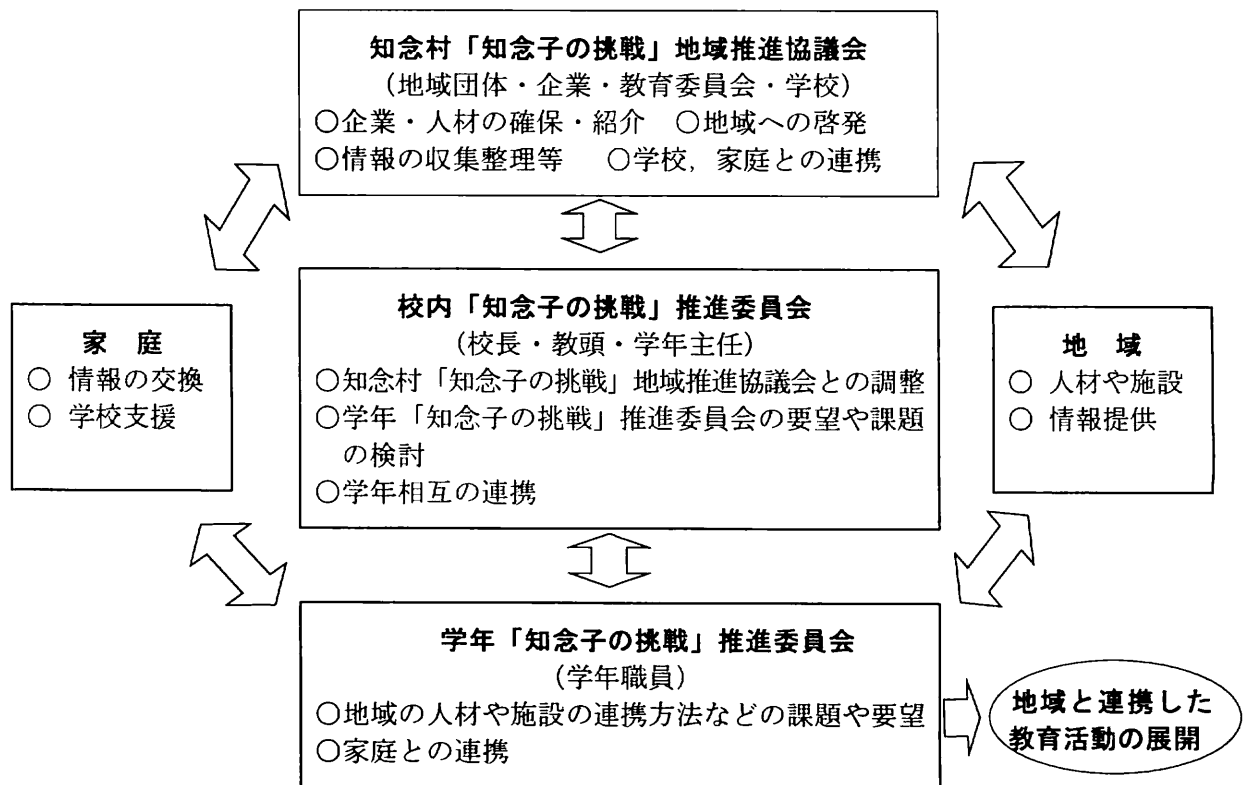


図3 学校支援組織体制

(3) 学校支援組織と連携した総合的な学習の時間の年間指導計画

総合的な学習の時間の目標を達成するために、総合的な学習の時間の年間指導計画に知念村「知念子の挑戦」地域推進協議会を位置付け連携を図る。

月	学 習 活 動	ね ら い	支 援 内 容	学 校 支 援 組 織
6	【1学年】 ○講演 知念村の誇る文化財 【2学年】 ○講演 知念村の産業	○調査活動 ・知念村の歴史・文化に興味を持つ ○調査活動 ・知念村の産業の現状を理解する ・知念村の産業について興味を持つ	・知念村の歴史文化に関する専門家を派遣 ・知念村の産業従事者を派遣	・知念村教育委員会 ・知念村教育委員会 ・知念村漁業共同組合 ・知念村商工会 ・沖縄県JA知念支店
7	【3学年】 ○「車イス、アイマスク体験学習」の実施	○体験活動 ・介助ができる ・思いやりの心が育つ ・福祉施設での体験学習に生かす	・福祉の専門家を派遣	・知念村社会福祉協議会
8	【2学年】職員 ○職場体験学習事業所の開拓、訪問 【3学年】職員 ○福祉体験学習施設の開拓、訪問	○職場体験学習事業所開拓、訪問 ・職場体験学習事業所開拓、訪問を行い事前に打ち合わせを行う ○福祉体験学習施設開拓、訪問 ・福祉体験学習施設開拓、訪問を行い事前に打ち合わせを行う	・事業所の紹介、協力依頼 ・福祉施設の紹介、協力依頼	・知念村教育委員会 ・知念村商工会 ・沖縄県JA知念支店 ・知念村漁業共同組合 ・知念村社会福祉協議会
9	【1学年】 ・斎場御嶽について班ごとにテーマを設定して調査	○調査 ・斎場御嶽について、多角的に調査し説明できる	・知念村の歴史文化に関する専門家に協力依頼	・知念村教育委員会
10	【2学年】 ○職場体験学習(5日間) 【3学年】 ○福祉体験学習(3日間)	○職場体験学習 ・身近で働く人がどのような仕事をしどのような気持ちで働いているのか考える ・働く人々や地域の方と交流を通して豊かな人間関係を学ぶ ○福祉体験学習 ・「人に対する思いやり」など豊かな人間関係を学ぶ ・福祉体験学習の施設が様々な人々の協力で成り立っていることを学ぶ	・事業所へ協力依頼 ・協力事業所を訪問 ・福祉施設へ協力依頼 ・協力福祉施設を訪問	・知念村教育委員会 ・知念村商工会 ・沖縄県JA知念支店 ・知念村漁業共同組合 ・知念村社会福祉協議会
12	【2学年】 ○職場体験学習発表会 ・体験学習したことをプレゼンテーションソフトを使い発表 【3学年】 ○福祉体験学習発表会 ・体験学習したことをプレゼンテーションソフトを使い発表	○発表会 ・体験学習を各自でまとめ、プレゼンテーションソフトを使い発表することができる ・お世話になった方々を招待して、感謝することができる	・発表会で、生徒を激励	・知念村教育委員会 ・知念村商工会 ・沖縄県JA知念支店 ・知念村漁業共同組合 ・知念村社会福祉協議会 ・職場体験学習事業所 ・福祉体験学習施設
1	【1学年】 ○調査発表会 ・調査したことをまとめ発表	○発表会 ・調査したことを、プレゼンテーションソフトや紙面を使い発表することができる ・お世話になった方々を招待して、感謝することができる		

Ⅲ 研究の実践

1 学年会の実施

(1) 学年の協働体制の確立の手だてと学校支援組織

学年の協働体制を確立するためには、①学年教師が目的を共有化すること②目的達成の意欲を高めること③共通した実践を行うことである。そこで総合的な学習の時間の取組を通して学年の協働体制を確立するための手だてをまとめた。

	条 件	手 だ て	主 な 取 組	学校支援組織
目的の共有化	<p>①学年の解決しなければならぬ共通の課題であること</p> <p>②達成可能な目的を提案すること</p> <p>③目的達成のための一つの役割と手だてが分かる内容であること</p> <p>④計画、実施、評価、改善に基づいた提案であること</p> <p>⑤話し合う時間の確保をすること</p>	<p>①総合的な学習の時間の課題に関するアンケートと話し合い共通の課題を確認する ・アンケート用紙を活用する</p> <p>②課題に関するアンケートとの結果から達成可能な目的を提案し話し合いにより目的を決定する</p> <p>③生徒の側に立って、実践過程を予測し、目的達成のための具体的な役割と手だてを提案する</p> <p>④実施後の検討、評価したことが次の実践に生かすことができる具体的な提案をする</p> <p>⑤時間の有効活用をする ・職員朝会後の時間の活用 ・黒板、文書を活用 ・提案内容を事前に配布 ・学年会の時間の確保</p>	<p>〈課題〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・福祉体験学習施設の確保が難しい ・福祉施設の体験学習前に、福祉に対する考えをどう育てるか ・福祉に関する専門的アドバイスが欲しい <p>〈目的〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・福祉施設などの体験学習前に福祉に対する考えをどう育てるか <p>↓</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校支援組織を活用して、専門家のアドバイスを受ける <p>↓</p> <ul style="list-style-type: none"> ・車イス・アイマスク体験を通して、福祉について、考えさせる ・車イス、アイマスク体験学習を通して、体の不自由な方の立場で体験し、介助の仕方、思いやりの心を育て、福祉施設での体験学習に生かす <p>〈内容〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・車イス・アイマスク体験学習 <p>〈方法〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・知念村「知念子の挑戦」地域推進協議会と連携して「車イス・アイマスク体験学習」を実施する <p>〈評価〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・提案された内容が生徒の変容が確認でき、目的が達成できるかを確認する ・ワークシート、介助チェックシートを活用する <p>〈時間〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・連絡事項は、職員朝会後に時間や黒板、文書で確認する ・提案の協議事項を事前に配布する ・学年会の開始時間を守る 	<p>学年「知念子の挑戦」推進委員会</p> <p>↓ 提案 ↓</p> <p>校内「知念子の挑戦」推進委員会へ提案</p> <p>↓ 提案 ↓</p> <p>知念村「知念子の挑戦」地域推進協議会</p> <p>↓ 依頼 ↓</p> <p>知念村社会福祉協議会</p>
目的達成の意欲	<p>①解決の見通しがはっきりしていること</p> <p>②提案内容について、意見が言える工夫をすること</p> <p>③教師の役割分担を、明確にすること</p>	<p>①具体的な解決方法を示した提案に基づいた話し合いで解決法を確認する</p> <p>②提案書を事前に配布し時間を確保する。</p> <p>③学年会で、それぞれの意見を出し合い話し合いにより役割分担を決定する</p>	<p>〈見通し〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・具体的な手だてを示した提案書をもとに話し合いで、解決の方法を確認する <p>〈意見、役割分担〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・提案書を事前に配布し自分の考えをまとめる時間を確保する ・提案書に役割分担者名を記入せずに自分の意見を述べ話し合いで役割分担を決定する ・介助方法などの資料を提供する。 	
共通した実践	<p>①実践で問題が生じた場合、全体で解決法を確認すること</p> <p>②効果が見られ場合、全体で認め、次の実践へ生かすこと</p> <p>③実施後の検討、評価を行い次の実践に生かすこと</p>	<p>①進捗状況表に進捗状況を記入し問題が生じた場合は、互いに協力支援する</p> <p>②実践の途中でも効果がある場合は、学年会あるいは職員朝会で報告する</p> <p>③学年教師のアンケート、生徒の自己評価を活用し評価を行う</p>	<p>〈協力、支援〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進捗状況表を活用し、進捗状況を記入し、互いに協力、支援する <p>〈効果〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・職員朝会終了後、学年会などを活用し報告する <p>〈実施後〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学年教師のアンケート、生徒の自己評価をもとに、評価を行い次の福祉施設の体験学習に生かす 	<p>知念村社会福祉協議会と連携し、「車イス・アイマスク体験学習」を実施</p>

(2) 目的達成意欲を高める学年会

目的達成意欲を高めるために、提案内容について、それぞれの立場から意見を述べ、話し合いにより役割分担を決定し責任を明確にする手だてとして、学年会進行表を作成し、留意点を意識しながら提案書を事前に配布し自分の考えをまとめる時間を確保した。また、提案書で役割分担者名を記入せずに、自分の意見を述べ話し合いで役割分担を決定する工夫を行った。

流れ	活動内容	資料	留意点
提案理由の説明 5分	司会が進行 1 教師、生徒のアンケートの結果から、車イス、アイマスク体験学習について提案 2 知念村「知念子の挑戦」地域推進協議会が支援することを説明	提案書 資料	課題意識の共有化 1 共通の課題であること
提案説明 30分	3 資料をもとに、提案内容の説明を行う。 ①ねらい ②場所 ③事前準備 ④当日の時間の流れ ⑤当日の展開 ⑥まとめ ①～⑥を区切って話し合う 4 役割分担について、話し合いにより決定し、提案書に記入する 5 車イス、アイマスク進捗状況について説明する	提案書 資料	目的達成のために意欲を高める 1 提案内容について、それぞれの立場から意見を述べているか。 2 教師の役割分担を明確にしているか。
まとめ 5分	6 今日の提案について、学年教師にアンケートを実施する。	アンケート	目的の共有化と目的達成のために意欲を高めることができたか。

(3) 進捗状況表

共通した実践を行うために、各自の進捗状況を確認し、互いに協力、支援する手だてとして学年会での役割分担決定後に進捗状況を活用した。

車イス、アイマスク体験学習進捗状況表			
※終わり次第日付を入れる。 ※問題が生じたら△を記入し連絡をしよう			
1 事前準備と役割分担			
役 割	担 当	日 付	
① 校内「知念子の挑戦」地域推進委員会へ提案			
② 知念村社会福祉協議会への連絡調整・依頼			
③ 講師との連絡調整			
④ 車イス、アイマスク借用願い			
車イス15台(知念、佐敷、大里社協)			
アイマスクの借用1、セット(大里社協)			

IV 研究の全体考察

1 学年の協働体制の確立が図れたか。

(1) 学年共通の課題をアンケートや話し合いで確認し、達成可能な目的と役割、方法を示した提案をすることで、学年教師が学年の目的を共有化することができたか。

図4は、提案事項に対して必要性を感じるかについてのアンケートの結果である。学年教師が学年の目標を共有化するための手だてをする前は「必要性を感じる」が平均3.7に対して手だての後は4.0となった。

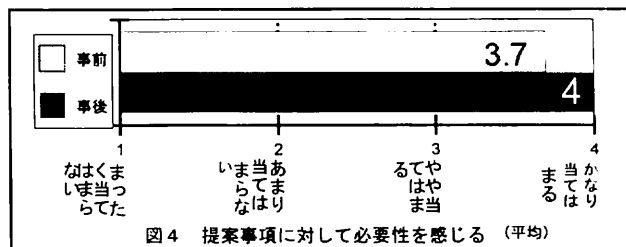
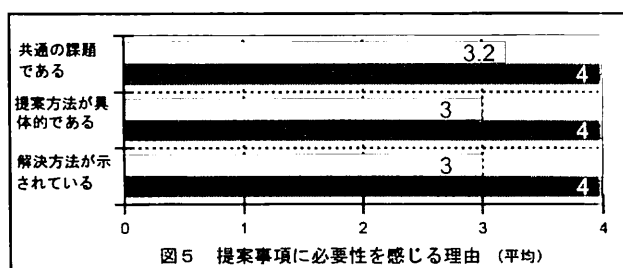


図5より提案事項に必要性を感じる理由として、「共通の課題である」が平均3.2から4.0になったこと。また「提案方法が具体的である」が平均3.0から4.0になったこと。さらに「解決方法が示されている」が平均3.0から4.0になったことがあげられる。そして「目的を共有化することができた」と思いますか」に対して資料1のような理由を述べている。



以上のことから、学年共通の課題に基づいた提案方法は目的を共有化する手だてとして有効であると考えられる。

※目的を共有化することができたと思いますか。理由を書いてください。

- ・学年共通の課題の中から提案されており、目的が明確であったので良かったのではないか。
- ・前年度の経験や課題点を確認することができて良かった。
- ・提案内容が事前に配布されたので内容を把握することができたので良かったのではないか。

資料1 目的の共有化に関するアンケート

(2) 提案内容についてそれぞれの立場から意見を述べ、話し合いにより役割分担を決定し責任を明確にすることで、目的達成の意欲を高めることができたか。

図6は、提案内容に対して、進んで取り組む気持ちがあるかについてのアンケートの結果である。目的達成の意欲を高めるための手だてをする前は「進んで取り組む気持ちがある」が平均3.7に対して手だての後は4.0となった。

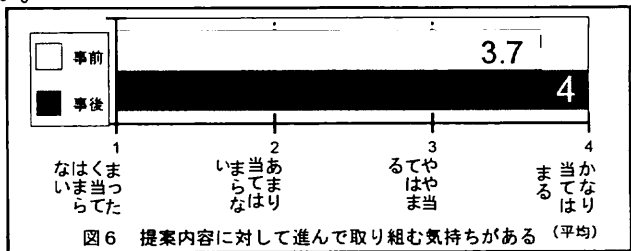
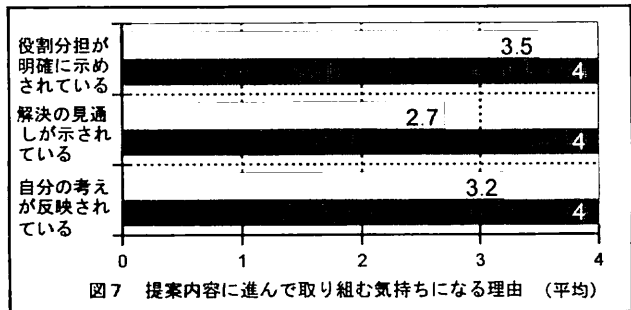


図7より提案内容に対して、進んで取り組む気持ちになる理由として「役割分担が明確に示されている」が平均3.5から4.0になったこと。また「解決の見通しが示されている」が平均2.7から4.0になったこと。さらに「自分の考えが反映されている」が平均3.2から4.0になったことがあげられる。そして「責任を持って取り組む気持ちになりましたか」に対し資料2のような理由を述べている。



以上のことから提案内容についてそれぞれの立場から意見を述べ、話し合いにより役割分担を決定し責任を明確にすることが目的達成の意欲を高める手だてとして有効であると考えられる。

※責任を持って取り組む気持ちになりましたか。理由を書いてください。

- ・役割が明確になって自分のやるべきことが分かった。
- ・口頭ではなく、文面で仕事の内容を明確に示していたので自分の役割を把握することができた。
- ・2学期の福祉体験学習に生かすためにも各自が責任をもって役割を行う必要があると感じた。

資料2 目的達成の意欲に関するアンケート

(3) 各自の進捗状況を確認し、互いに協力、支援することで、共通した実践を行うことができたか。

図8は、決定した内容に対して、進んで取り組んでいるかについてのアンケートの結果である。共通した実践を行う手だてをする前は「進んで取り組んでいるか」が平均3.5に対して手だての後は4.0となった。

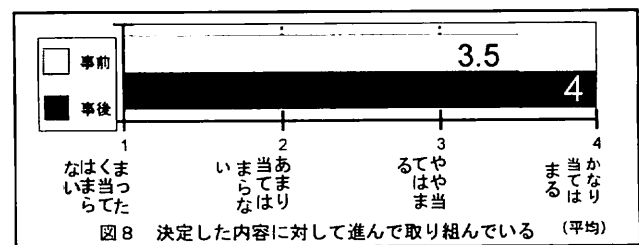
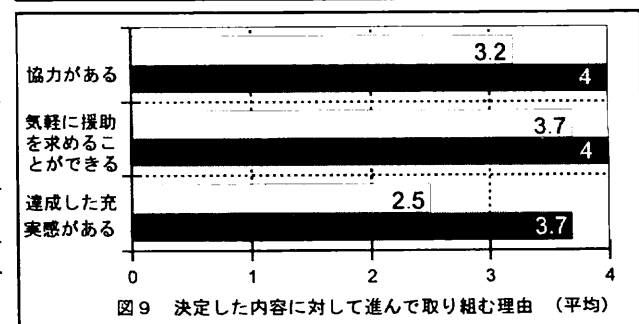


図9より、進んで取り組む理由として「目的達成のために協力がある」が平均3.2から4.0になったこと。また「行き詰まったときには、気軽に相談したり、援助を求めることができる」が平均3.7から4.0になったこと。さらに「達成した充実感」が平均2.5から3.7になったことがあげられる。そして「学年会で決定したことを共通して取り組むことができましたか」に対して資料3のような理由を述べている。



以上のことから進捗状況表を活用することが共通した実践を行う手だてとして有効であると考えられる。

※学年会で決定したことを共通して取り組むことができましたか。理由を書ってください。

- ・事前の役割分担をもとに、進行状況を記入することで互いに協力して取り組むことができた。
- ・声をかけ、気軽に相談することができ互いに行動することができた。

資料3 共通した実践に関するアンケートより

(1)(2)(3)の結果から学年教師の目的の共有化を図り、目的意欲を高め、共通した教育実践を行うことにより、学年の協働体制の確立を図ることができたと考察できる。

2 学校支援組織との連携を通して、総合的な学習の時間の充実が図れたか。

総合的な学習の時間に知念村「知念子の挑戦」地域推進協議会との連携を図り、知念村福祉協議会の専門スタッフの協力のもとに「車イス、アイマスク体験学習」を実践した。

その結果、図10のように事後の生徒の自己評価は「体の不自由な方を介助できるか」に対して「良くできる」「できる」を合計すると95%の生徒が介助できると答えている。さらに図11から「体の不自由な方への思いやりが大切であると思ったか」に対して「とても思った」「思った」を合計すると98%の生徒が思いやりが大切であると答えている。また、学年教師の



車イス、アイマスク体験学習

アンケートで『知念子村「知念子の挑戦」地域推進協議会の支援で、外部の講師との連携がうまく行ったと思う。さらに、10月の福祉体験学習に向けて地域推進協議会との連携を強めたい』と評価していることから、学校支援組織との連携を通じた総合的な学習の時間の充実が図れたと考えられる。

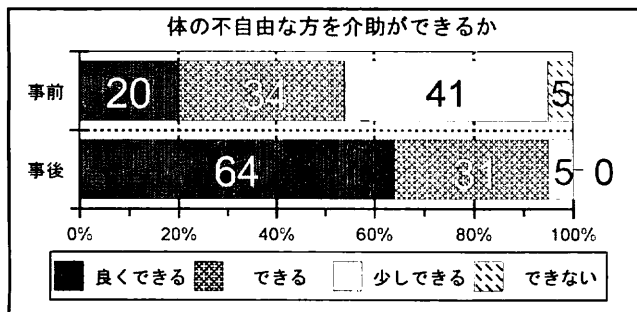


図10 生徒の自己評価

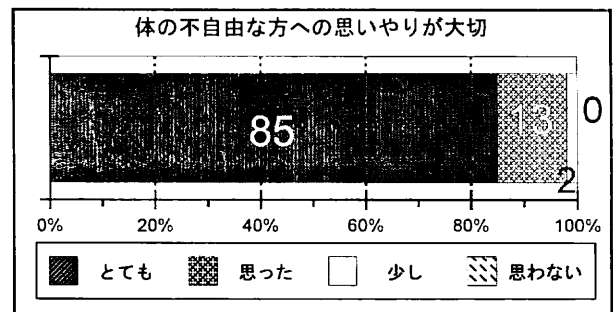


図11 生徒の自己評価

IV 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 学年教師の目的の共有化を図り、目的意欲を高め、共通した教育実践を行うことにより、学年の協働体制の確立を図ることができた。
- (2) 学校支援組織との連携を通して、総合的な学習の時間の充実を図ることができた。

2 今後の課題

- (1) 学年の協働体制を継続していくための提案方法の工夫・改善
- (2) 学校支援組織との連携を継続発展させた総合的な学習の時間の充実

〈主な参考文献〉

岡本一明編集 『学校の組織設計と協働態勢づくり』
 葉養正明編集 『学校と地域の新しい関係づくり』

教育研究所 2005年
 教育研究所 2005年